
編集後記

文化環境研究会は、長崎大学環境科学部にかつてあった「文化環境講座」に属する教員が立ち上げた研究組織である。きっかけは当時、講座主任を務めていた若木太一先生の「文化環境学会を作ろう」という構想（あるいは妄想）にあった。ひとまずは文化環境コロキウムを開催することをわれわれが決断したのは、2006年の春だった。

学部に作られたサークルではあったが公的なものではないから、有志によるヴォランティアな献身のみによって支えられてきたところに特色がある。そのため資金的にはつねにぎりぎりの運営を強いられてきたが、それをカバーするだけの教員、大学院生、学部生の協力があつたから続けてこられたのである。言うまでもないことだが、横着者、自己保身、手前勝手な人間ばかりで作られた組織は長続きしない。その意味においては、文化環境研究会の運営には苦労はなかったと言えるかもしれない。

さきに、この研究会を「研究組織である」と書いたが、その主たる活動は、コロキウムにおける研究交流、学部生による卒業研究の中間発表、優秀卒論の選出、そして『文化環境研究』の刊行の4つであった。こうして振り返ってみると、この研究会の活動のほとんどは教育に関する動機に基づいていた。事実、研究会所属教員のゼミの、とりわけ4年生は夏と秋の2回にわたる中間発表会を大きな節目として調査計画を立てていたし、他のゼミの発表を聞いて評価することが彼らの学問への動機づけとなり、学問的な甘えを拒絶する態度を醸成していたのは間違いない。2月に開かれる卒業研究発表会は、これは本研究会のイベントではなく学部の行事として行われていたが、ここへの本研究会関係教員ならびに学生の出席率と参加度合いはきわめて高かった。この手の行事ではまみられる「自分の発表が済んだらとっとと会場をあとにする」といった不作法は文化環境研究会では許されなかったし、そんなことが認められるなど学生たちも思っていなかった。

学部生や院生が発表し、優秀と認められたものは10ページの原稿にまとめられ『文化環境研究』に掲載された。長大リポジトリからダウンロードすることが可能であり、各所で参照されていると聞く。

その『文化環境研究』は今号をもって終刊となる。文化環境研究会所属教員のほとんどが2014年に新設された多文化社会学部に移籍したことが最大の理由である。先号の刊行（2012年3月）から2年半もの長きにわたって刊行が止まっていたのも、新学部創設準備に追われていたからであり、刊行を待たせてしまった寄稿者の方々には編集担当者としてお詫びを申し上げる次第である。

文化環境講座はもはやない。かつて「文化環境」というタームで研究領域をきりとろうとしていたわれわれは、いまは「多文化社会」というキーワードで像を結ぶ「何か」をつかみ取ろうとしている。若木先生の妄想は、いま多文化社会学部というポテンシャルの高い新学部として新たなスタート地点に来たと言える。いま、ここに、文化環境研究会はその役目を終え、次のステージへ向かうのだ。（増田研）